

草木成仏と木画本尊について

浅井憲照

日蓮聖人は本尊を造立する意味において、草木成仏を重要な要件としてとりあげられた。

すなわち、仏教ではいずれも木像なり画像なり本尊を立てるのであり、曼荼羅にしても草木成仏という原理がなければ本尊たりえないとされたのである。

一

この木や紙でできた仏像を本尊として崇め奉るにはこれを開眼しなければならぬ。開眼とは木絵の仏像にたましいを入れ、その眼を開くことである。これには事と理の開眼がある。

仏師が仏像を刻み、画家が仏絵を画いて最後に眼を入れることを事の開眼と呼び、僧が経巻を読んで木絵二像の仏眼を開き、仏意を成就することを理の開眼という。日蓮聖人は『木絵二像開眼之事』において次のように

述べられている。

まず仏は三十二相という相好を具えているが、それはすべて色法である。その三十二相のうち、千輻輪相から無見頂相までの三十一相は可見有対色であるから画くことも造ることもできる。この可見有対色とは、眼等によって見ることができるので可見、五根によってその物を認知することができる対象であるので有対色と呼ぶ。

一方、残りの一相である梵音聲相は不可見無対色であるから画くことも造ることもできない。仏が滅した後も前の三十一相は表現することができるが、この梵音聲が欠けるから「仏」と称することはできないのである。生身の仏には三十二相が具わって、さらに心法もあるが、木絵の像には三十一相しか具わっていない上に、心法もないからその優劣はまさに雲泥の差があると言わねばならない。

ところが、涅槃經⁽¹⁾には生身の仏と木絵の二像はその功德は等しいと説き、大瓔珞經⁽²⁾には木絵の二像は生身の仏に劣ると説く。このように仏説である經典に相反する内容が説かれている。

そこで日蓮聖人は、

木画の二像の仏の前に經を置けば三十二相具足する也。
(定遺七九一頁)

と述べ、三十一相しか見えていない木画の二像もその仏の前に御經をおけば三十二相を具足するとされる。しかしそれだけでは仏になることは難しい。三十二相があつても仏の心法がなければ生身の仏とは違うからである。また木画像の前に安置される經典によつても異なつてくる。すなわち五戒經⁽³⁾を置けば輪王と等しく、十善論を置けば帝釈と等しい。同様に欲論は梵王、阿含經は聲聞、方等般若の一時一会の共般若⁽⁴⁾は縁覚、華嚴方等般若の別円は菩薩と等しいが、いずれも円満なる仏ではない。

二

このように爾前經を置いたときには木絵二仏本尊と崇めることはできない。三十一相の仏の前では法華經のみ

が純円の仏ならしめるのである。觀普賢經では法華經の仏のことを仏の法身報身応身の三種の身は方等より生ずるとある。この方等というのは五時の第三である方等部をいうのではなく、法華經のことを方等といったのである。

仏が声を発するのに二つの義がある。一つは人を誘うために声を出すことがある。これは随他意の聲である。二つには自分の思いをそのまま聲に出す。これは随自意の聲である。これらは共に意が聲と顕れるのである。意は心法で聲は色法である。意より聲を出すことは心法より色法を生ずることである。又聲を聞いて心を知るからこの時は色法が心法を顕す。色心は不二であるが、表現的には二つとなる。従つて念仏の御意が顕れて法華經の文字となり、法華經の文字は仏の御意を顕す。故に法華經を拜読するとき、これをただの文字ではなく、仏の御意とみなければならぬ。

日蓮聖人も、

法華經を心法とさだめて、三十一相の木絵の像に印すれば木絵二像全体生身の仏也。草木成仏といへるは是也。

(定遺七九二—三頁)

と述べて、法華經こそ仏の心法であるから、これを三十一相の木絵像の前に安置するならば木絵はそれ自身全く生身の仏となる。これが草木成仏の姿であるとされる。

このことについては天台大師も「法華玄義」に、

受^テレ請^ク説^ク時^ハ只是^ニ説^ク於^レ教^ノ意^ニ。教^ノ意^ハ是^レ仏^ノ意^ニ。仏^ノ意^ハ即是^ニ受^テレ請^ク説^ク時^ハ。如^レ此^ノ艱^ニ難^{アリ}。
此^ニ於^レ余^ノ經^ニ余^ノ經^ニ則^シ易^シ。(5)

と述べている。すなわち仏は請を受けて説く時はただ教意のみを説くのである。教意とは仏意で、仏意とは仏智である。仏智は至つて甚深であり、故に方便品に於いて仏は三度止め、舍利弗は四度請して初めて仏の説法があった。法華經にはこうした重厚な化儀があったのである。これを余經と比べると余經にはこのような難儀はない。よつて余經は聴聞し易しとなるのである。

この釈の中の仏意とは色法である文字そのものをじかに心法として解釈したものである。よつて法華經が仏の心法、すなわち仏意であることは聖人の私言ではなく、天台大師が既に釈したものである。

三

さて、草木成仏論についてまず天台大師を見ると、

「摩訶止観」に

一色一香無非中道(6)

と述べ、妙樂はこの文を受けて

然もまた共に色香中道を許す、無情仏性惑耳驚心す。

(7)

と釈している。つまり天台大師は一つの色でも一つの香のように極微細な物質でも、中道でないものはないと言っている。これを受けて妙樂は世の人々は皆この色香等を非情の物質であるから仏性はない、従つて成仏はできないといっているが、もし今この色香が中道そのものであるとして非情の草木国土等に仏性があり、草木も成仏すると説くならば聞く者は耳を惑わし、心を驚かすだろうとし、惑を解消するために十義(8)を立てた。

四

一方、日蓮聖人の草木成仏義について、『本尊抄』に見られる教示にそつて検討してみたい。

本尊抄全三十問答のうち、草木成仏に関する教示がみられるのは全部で四問答が数えられる。しかし本来ならば「本尊抄」の全体を通して草木成仏論に関連すると解釈するべきであるが、ここでは第九・十・十一の三問答

と、第十九問答中の答釈の文についてのみ考えてみたい。はじめの第九・十・十一問答の文は天台大師附順の理具一念三千の理による草木成仏を明かす文で、それに對し第十九問答の答釈の文は日蓮聖人独自の本門事具一念三千の仏種による草木成仏を説く文である。

まずはじめに天台所談迹門理具一念三千の理による文である。第九問答に、

問云 百界千如與一念三千差別如何。答云 百界千如限有情界。一念三千互有情非情。

(定遺七〇三頁)

とある。天台大師の「法華文句」「法華玄義」の教相書二つには百界千如の義を説くが、まだ一念三千の法門は説かない。百界千如は正報である有情界のみに限るものであつて、非情にはゆきわたらない。これに對し、觀心の書である「摩訶止觀」に明かされる一念三千は有情・非情の両方にわたる。よつて非情である草木等にも一念三千の仏性が具わつてゐるのである。

第十問答に、

不審云 非情互十如是草木有心如三有情可レ為成仏如何。答曰 此事難信難解也。天台難信難解有レ一。一教門難信難解。二觀門難信難解。(中

略) 觀門難信難解。百界千如・一念三千。非情之上。色心二法十如是也。雖爾於木画二像者外典内典共許之為本尊於其義出自天台一家。草木之上不置色心因果。木画像奉持本尊無益也。

(定遺七〇三頁)

また第十一問答に、

疑曰 草木国土之上十如是因果二法出何文乎。

答曰 止觀第五云 国土世間亦具十種法。所以惡国土相性体力等。積籤第六云 相唯在色。性唯在心。体力作縁義兼色心。因果唯心。報唯在色等云云。金鉉論云 乃是一草一木一礫一塵各一仏性各一因果。具足縁了等云云。

(定遺七〇三―四頁)

とあつて、教門の難信難解とともに觀心の難信難解をあげる。この非情である草木等が一念三千を具えるということは、五陰・衆生・国土の三世間、依正二報にわたつて具備する十界・十如である。十界の依正二報、即ち有情・非情に十如を具すということは非情である草木・国土等にも色心の二法・因果の修行を具してゐることである。その証文は「摩訶止觀」や「積籤」「金鉉論」等の文に明らかである。

「摩訶止觀」の

国土世間亦具十種法(9)

等の文は非情の国土世間にも十如是を具すことを証明する。「釈籤」の

相唯存色(10)

等の文は十如是を凝縮すれば色心二法であることを証明している。十如是が色心二法であるということは有情の衆生ばかりでなく、非情の草木国土も色心二法を具していることになる。非情であっても色法のみを具すのではなく、心法をも備えているのであって、草木にも心があることに他ならない。草木にも心があるのだから、有情と同じように法身・修行・成仏を具足しているわけである。

この非情有仏性を説いたものが「金鉍論」である。

「金鉍論」の

乃是一草一木(11)

等の文は非情である草木等も正了縁の三因仏性を具すことを証明するものである。

以上のように、非情の草木国土にも三千を具する、三千を具すということは既に十如是を具すこと、十如是を具すことは草木国土にも色心因果を具すことである。色心を具すことは草木も有情のように心を有すること、心

を有することによってその心に三千仏性を具して有情のように仏性を開發して成仏することになる。

つまり非情の草木・国土も本来有情のように色心二法を具する。よって草木紙墨でつくられた木絵二像の本尊は生きた仏として衆生に働きかけることができるのである。

五

第十九問答の答釈に、

普賢經云、此大乘經典諸仏、寶藏十方三世諸仏眼目。乃至出生三世諸如來一。乃至汝行大乘、不斷一。佛種等。又云、此方等經是諸仏眼。諸仏因是得具。五眼。仏三種身、從三方等生。是大法印。印涅槃槃海。(中略)華嚴真言等諸宗依經(中略)演說其近因近果、不顯其遠因果。速疾頓成說之亡失、三五遠化、化道始終、削跡不見。(中略)本有三因、無之以何定一佛種子。(中略)雖然所詮非一念三千佛種、者有情成仏・木画二像之本尊、有名無実也。(定遺七一〇—一頁)

とある。ここでこの經文を引用されたのは法華經に仏種が具わっていることが明されるためである。

この普賢經において、法華經は諸仏の功德の宝蔵であり、十方三世諸仏の智慧の眼目であり、三世の諸の如来を出生させる種であるとする。故にこの經を受け持つ者は仏の身を持ち、また仏の事を行なうものである。方広平等の理を説くこの經を受持し修行して、決して仏種を断絶させてはならないと説く。

また、この法華經は諸仏の眼である。諸仏は皆この法華經の眼によって、仏の知見である肉眼・天眼・慧眼・法眼・仏眼の五眼を具えることができたのである。仏の法・報・応の三身も、この法華經によって出生したのである。法華經という經典は大法の印であり、仏の証悟たる涅槃海であることの証明として捺印される。従って法華經こそが諸仏の護念にあずかる仏子となるゆえんであり、人天に福徳をもたらすのである。

そこで、華嚴・真言などの諸宗の依經を見てみると、蓮華蔵世界の十方蓮華の千・百億の釈迦、台上の毘盧遮那仏、十方雲集の諸仏如来、両界曼荼羅の千二百余尊などが説かれているが、これらの本身である釈尊についてはその近迹の因果が説かれるだけで、その遠本の因果を開顕しない。従って真言の經に速疾頓成の成仏論を明かしても成仏の基盤である三千塵点、五百塵点の久遠の昔

からの化道を亡くし失っているから、種・熟・脱という仏の化道の始終については全く説かれていない。

三世にわたる化道の始終を失うことは現在の化道しか説かない。つまり、正因仏性の本有は認めるが、過去遠々劫よりの聞法下種を説かないから、了因仏性・縁因仏性の本有は認めないわけであり、本有の三因仏性を認めないならば仏種を定めることはできない。

本門一念三千の仏種は法華經にのみ説くところであつて、たとえ有情の成仏を余經に説いても、木像・画像の本尊を他宗が立ててもそれは名のみあつて実なきものである。一念三千具足の觀心が成仏の根本種であつて、これによって成仏するのであるから、一念三千の仏種を説かなければ有情の成仏も非情・草木の成仏も理由のないことになる。本尊を崇拜するゆえんは木絵に非情成仏の真理が究意して初めて本尊は心を有し、現に衆生に働きかけたもう存在であることが確約できるからである。

註

日蓮聖人遺文の引用は『昭和定本日蓮聖人遺文』（立正大
学日蓮教学研究所編）によつた。

(1) 涅槃經後分上にある經文。「所得福徳其福無異何以故雖仏

滅後法身常存是以深心供養其福正等」とある。

(2) 『菩薩瓔珞經十一供養舍利品第三十』。

(3) 提謂五戒經、優婆塞五戒經等。

(4) 聲聞緣覺菩薩の三乗のために共して説かれた方等般若をさす。

(5) 『法華玄義』 会本十上ノ十一。

(6) 『摩訶止観』 会本一ノ二ノ九丁。

(7) 『摩訶止観輔行伝弘決』 一。

(8) 十義とは一に身に約す。二に体に従う。三に事理に約す。同様にして四に土、五に教証、六に真俗、七に撰属に約す。八に因果、九に宣しきに随う。十に教に随うというものである。

(9) 会本五ノ三の二十丁。

(10) 『法華玄義釈籤』 会本七丁ノ二十四丁。

(11) 華嚴宗澄観の非情に仏性なしとする説を破斥し、仏性は有情非情にわたることを論じる妙楽の著述。会本二十七丁。